津軽藩日記に見る丸尾一族の足跡

海賊から海商へ

丸尾義輔

津軽藩日記に見る丸尾一族の足跡

海賊から海商へ

丸尾義輔

塩飽島牛島の庄屋塩飽伍左衛門との関わりについて

1．丸尾家と白幡家との関わりは、私の祖母、白幡ユエは青森県蟹田町の丸尾家より明治３２年（１８９９年）に白幡家に嫁ぐ。

2．そのむかし、丸尾家の祖先はヒバ材の積み出しに来て下北の九艘泊沖に碇泊した九艘の塩飽船は、大嵐のため相次いで遭難し、命からがら蟹田湊にたどりつき安住したと伝えられている。蟹田に安住した塩飽衆は廻船問屋として活躍したと言われる。

青森県下北半島に九艘泊という所があり、「東奥沿海日誌」によると、昔大風雨の際、近村の船が皆破砕したのに、この湾に入った九艘は無事であったことから九艘泊と言われている。

言い伝えによると、塩飽伍左衛門の次男・三男が新天地を求め十艘の船で東北に来るも、大嵐に遇い十艘のうち九艘が難破し流れ着いたことによって、九艘泊と言う地名がついたとも言われている。

3．熊野宮と丸尾家との関わりは、古文書によると、神社（熊野宮）の草創は寛文３年（１６６３年）に、四国塩飽島出身の先祖が、生国塩飽水軍の鎮守、熊野宮を勧請し宮建てをしたものだと伝えられている。

大嵐のため相次いで遭難し、命からがら蟹田湊にたどりついた一艘には、御神体三体を積んでいたので親船であったのではないか。御神体を積んでいたことによって、遭難を免れ青森県津軽半島蟹田町にたどりついたと言われている。

丸尾家と御神体との関わりは、寛文３年（１６６３年）に、塩飽伍左衛門によって熊野宮が建立され、御神体が祀られたことによるものである。

丸尾家の熊野宮には、三神を祀っているが

かつみ　このかみ　すさのをのみこと　　いざなぎのみことかみ　　いざなみのかみ

三神とは、　家都御子神（素盞嗚尊）・　伊邪那岐神・　伊邪那美神のことで、前述したように、寛文３年（１６３３年）瀬戸内海の塩飽島から移住した丸尾氏の先祖（牛島・庄屋伍左衛門）が塩飽島からもたらしたものと言われる。

4．「津軽藩日記（以下御日記という）」によると津軽藩と丸尾家との関わりは、江戸中期の宝永６年（１７０９年今から２９７年前）に、津軽藩に五千両の敷金を納めて登せ米や津軽のヒバ材を江戸や大阪などに海上輸送をしたこと、津軽藩と丸尾家との間に金銭の貸借関係があったことによるものである。

「御日記」は、弘前城中で記録された「御国日記」と、江戸上屋敷で記録された「江戸日記」によるものである。「御国日記」は寛文元年（１６６１年）より、元治元年（１８６４年）まで、「江戸日記」は寛文８年（１６６８年）より明治元年（１８６８年）までで、蟹田町丸尾家のことについては「御国日記」に記録されている。

「御国日記」に登場する蟹田町丸尾家の祖先である塩飽の丸尾与四兵衛の初見は貞享３年（１６８６年）である。

津軽半島東海岸の中心に位置する蟹田町とほぼ同緯度の湾を渡った下北の川内湊に、寛文２年（１６６２年）塩飽の伍左衛門が勧請したという熊野宮が現存している。川内町には塩飽から移住して商人・船大工・水夫となった人々が定住している。同町の泉竜寺には幾代かの塩飽衆たちが眠る墓地があり、その活躍を物語っている。

下北半島の川内湊は、津軽半島における蟹田湊と同様にヒバ材移出港として著名であり、両湊とも同じ寛文初期に熊野宮を奉持した塩飽衆たちが進出しているこが判明している。

蟹田湊に本拠を定めた丸尾与四兵衛は、この後「御国日記」に見るかぎりでは、塩飽の丸尾伍左衛門の出先機関的な役割を担って藩内のヒバ山の入札や登せ米の回漕に活躍している。

初め丸尾家が蟹田に熊野宮を祀ったのが寛文３年（川内の塩飽衆が祀った熊野宮は寛文２年という）だとすれば、「御国日記」に登場するまでの間隔が約２３年ほどあるので、熊野宮を奉持して初めて蟹田に定住した塩飽衆は、「御国日記」に登場する丸尾与四兵衛の先代だった可能性もないわけではない。
「御国日記」は貞享３年（１６８６年）から、宝永６年（１７０９年）まで２０数年間登場しているので、丸尾与四兵衛以前に先代がいたことが推測できる。

5．蟹田町丸尾氏として「津軽藩日記」に登場した人々を挙げると、与四兵衛―由四兵衛―忠左衛門―弥左衛門―次郎右衛門―三次郎―久蔵となる。
寛文３年から江戸末期まで約２００余年間であり、家長的権威の保持期間を平均的に約４０年とすると、約五代くらいの期間になると思われる。

江戸中期以降は空白の時代が余りにも多い。寛保（１７４１年）から元治（１８６４年）までの約１２０数年である。上記からすると、この空白の時代には約三代くらい続いたものと思われる。

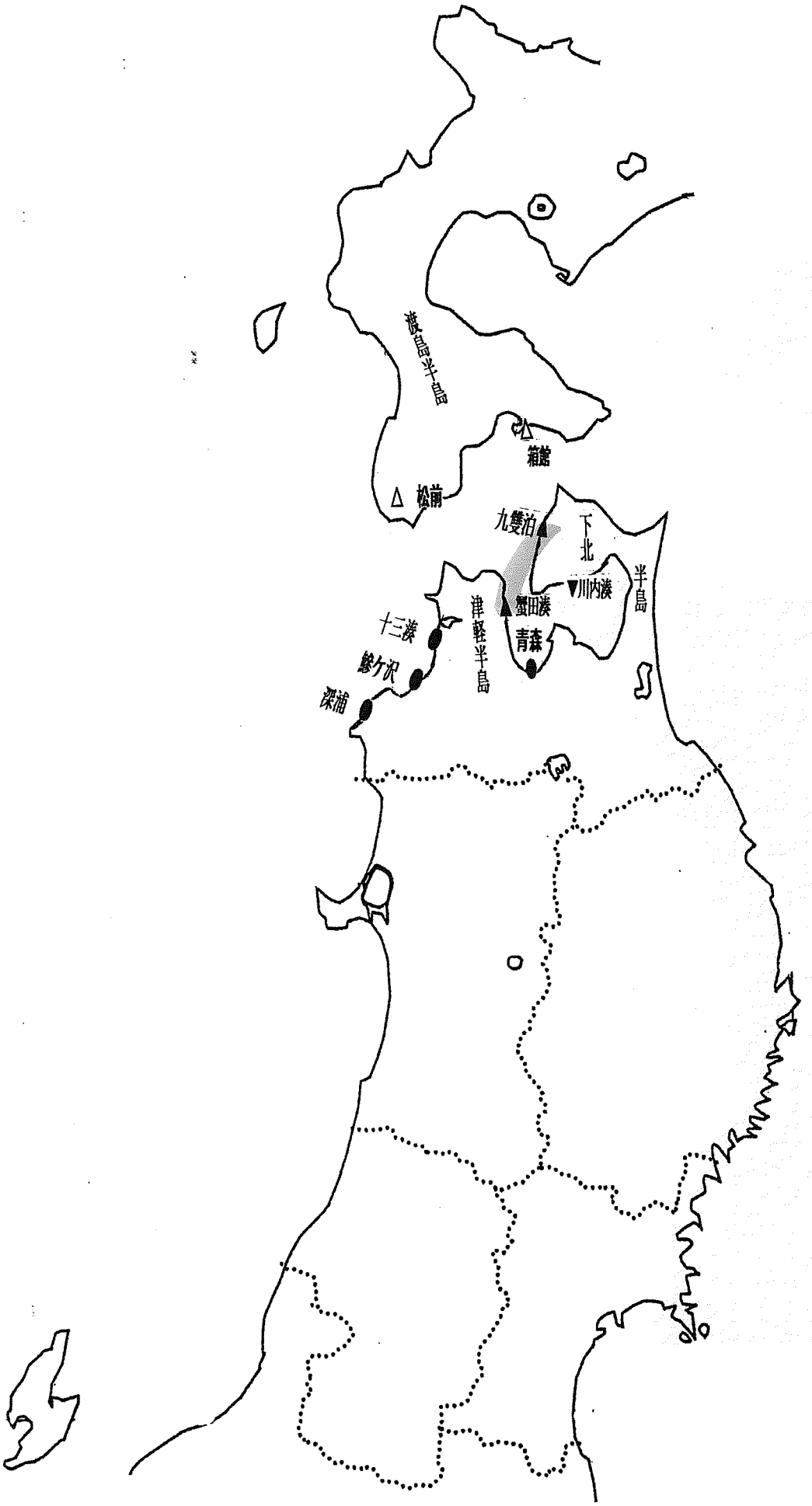
いつごろどうしたのか、廻船業から手を引き、蟹田町奉行所の同心警固に転身して「御日記」は終わる。

丸尾家は昭和４３年（１９６８年）蟹田地方を襲った集中豪雨による大洪水によって歴世の史料や伝来の過去帳までも失ったことから、同家累代の法名、俗名までが不明になっている。菩提寺の一向山専念寺も江戸時代中期に焼けていることなど、社寺、縁類など八方手を尽くすが徒労に終わる。

明治時代に入り旅籠（旅館）を営み、特に北海道ではニシンの最盛期だったので蟹田から北海道に働きに行くヤン衆（漁場で働く若い衆）達が、丸尾の旅籠に泊まり、それはそれは丸尾の旅籠は繁盛したそうである。だが、ニシンが捕れなくなることによって、利用者も少なくなり旅籠も衰退の道を辿るのである。旅籠は現当主の丸尾義輔氏の先代で廃業している。

現当主である丸尾義輔氏は、私とは又従兄弟にあたり、明治以降の人達から考え四代目にあたると思う。「津軽藩日記」に記録されている丸尾与四兵衛から始まり現当主の丸尾義輔氏は、十二代目にあたるのではないかと推測している。

雑駁なまとめのため、十分にご理解できない点が多々あると思いますが、史料が乏しいためと、私自身の取り組みの浅さが、このようなまとめしかできなかったことをお詫び致します。


渡島半島
箱館
松前
九戸泊
下北
半島
川内湊
蟹田湊
津軽半島
青森
十三湊
鰺ケ沢
深浦

倭寇、塩飽水軍の直流

おら家の伝承

丸尾　義輔（44）

本誌第六十号で、北山さんが言っておられた「…蟹田熊野宮（八幡宮の前身）…」は私の家の氏神です。

この社（やしろ）は大正二年かに、専念寺裏の社地（通称吉田屋の畑）から上蟹田の現在地に遷座しており、古文書によると、神社の草創は寛文三年（一六六三）に、四国塩飽島出身の先祖が、生国塩飽水軍の鎮守、熊野宮を勧請し宮建てをしたものだと伝えられています。

四国の塩飽島というところは、有名な讃岐丸亀、多度津の前面の海中に浮かぶ七つの島の総称で、九世紀ごろの瀬戸内の海賊、十二世紀ごろの塩飽水軍、十五世紀ごろの倭寇や八幡船の根拠地として知られた土地柄です。

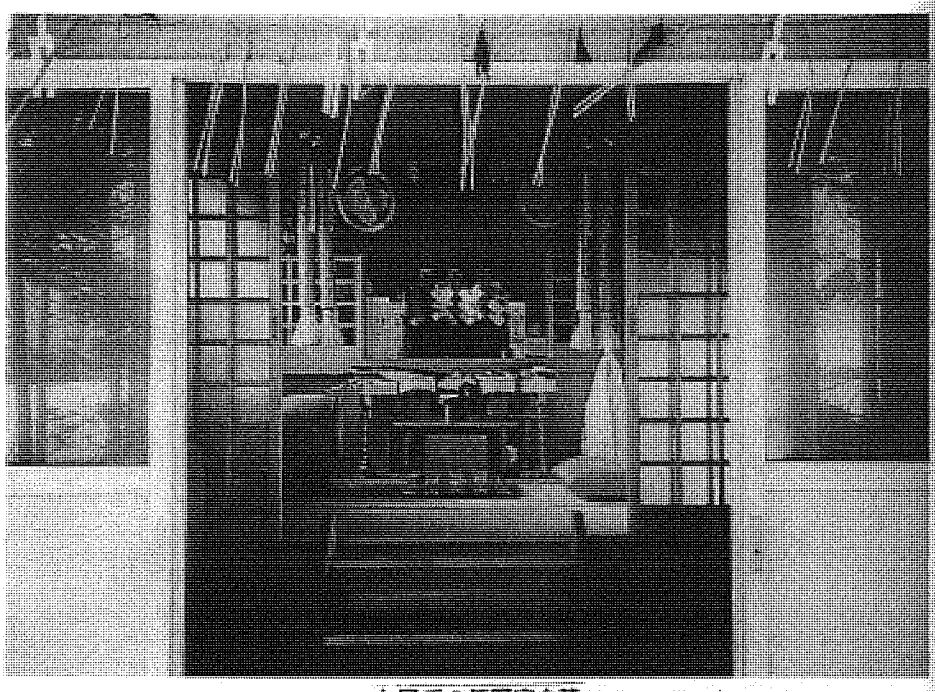
私の家の「丸尾」は、豊臣秀吉の朝鮮征伐の際、海運の功によって賜ったと伝えられているのですが先年NHKの「日本ところどころ」で放映されたところによると、織田信長は石山寺攻撃で、寺側の毛利方水軍と大阪湾頭で海戦となり、大敗を喫したため塩飽水軍を懐柔し、装甲船を仕立てて決戦を挑み、小早川隆景の率いる毛利水軍に大勝した折の功賞として、先祖の塩飽伍左衛門に丸尾の姓と三千石を与え、塩飽七島の取締りを命じたといい、この朱印状は今も塩飽本島に保存されているというのです。

やがて、天下を統一した秀吉の兵農分離の政策によって塩飽水軍は普通の漁民や造船業、製塩業、回船業、船頭、水夫などの職につき、このころ丸尾氏も商船隊に転身したようです。

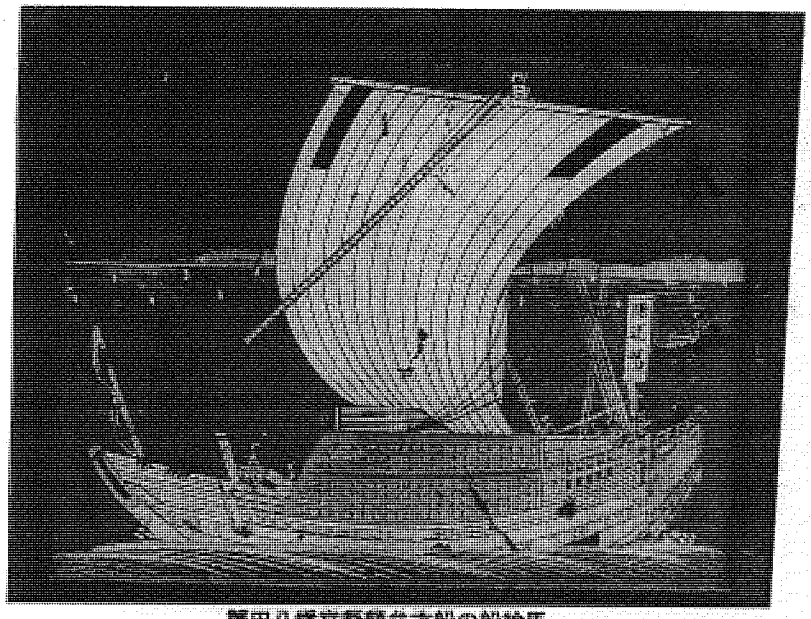
この後、いつのころでしょうか、陸奥湾内へ、ヒバ材の積み出しに来て下北の九艘泊沖に碇泊した九隻の塩飽船は、大嵐のため相次いで遭難し、命からがら蟹田湊にたどりつき安住したと伝えられています。

蟹田に安住した塩飽衆は、回船問屋として活躍したほか、関ヶ原合戦の落人と見られる当町の石田氏、黒田氏、鈴木氏、張山氏、小倉氏など上方亡命者の海上輸送をしていたと聞いています。

寛文３年に勧進した丸尾氏の熊野宮



丸尾氏の熊野宮内陣



蟹田八幡宮整頓并才船の船絵馬

津軽藩庁日記（弘前市立図書館）

丸尾氏伝来の船具足（一領）

ほかに脇差一振り、火縄銃一丁（２重巻張り）銘に、宝政六甲寅年攝州田善五郎作とおり、さらに喬直益式新張三百旋之内二十、と彫刻